

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和5年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第2号（5月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎ 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス : <http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス : nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

令和5年度 病害虫発生予報 第2号

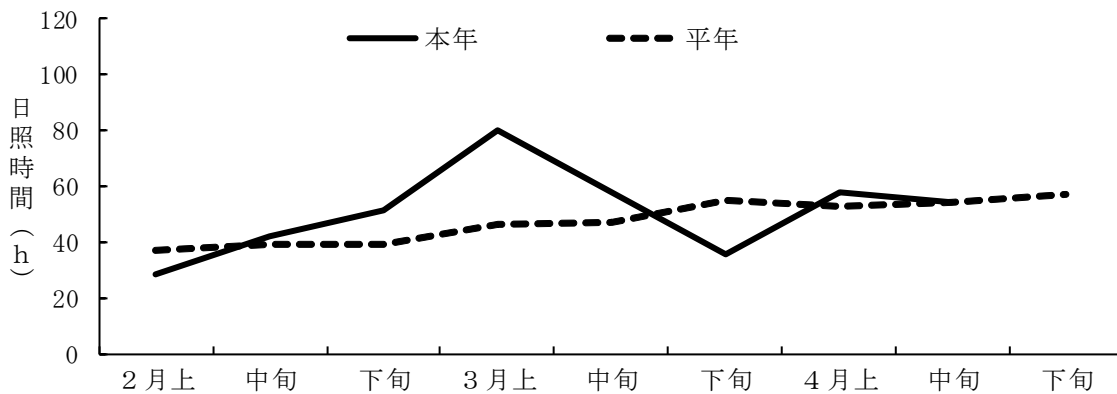
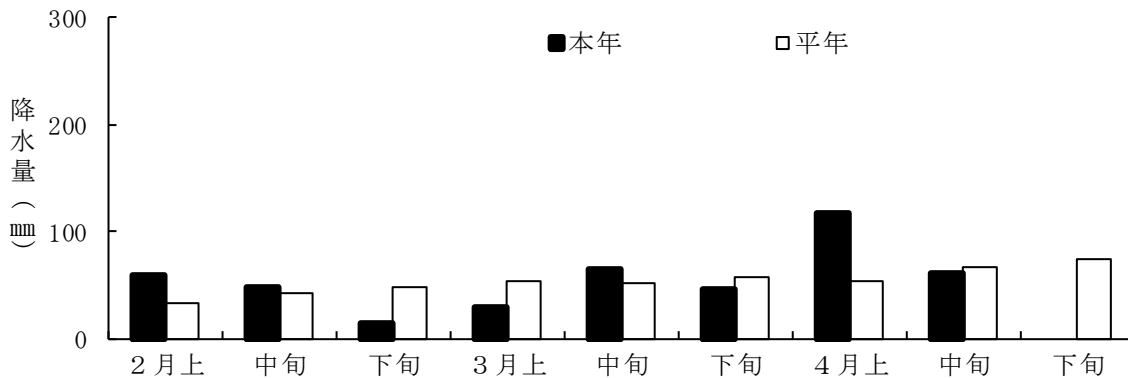
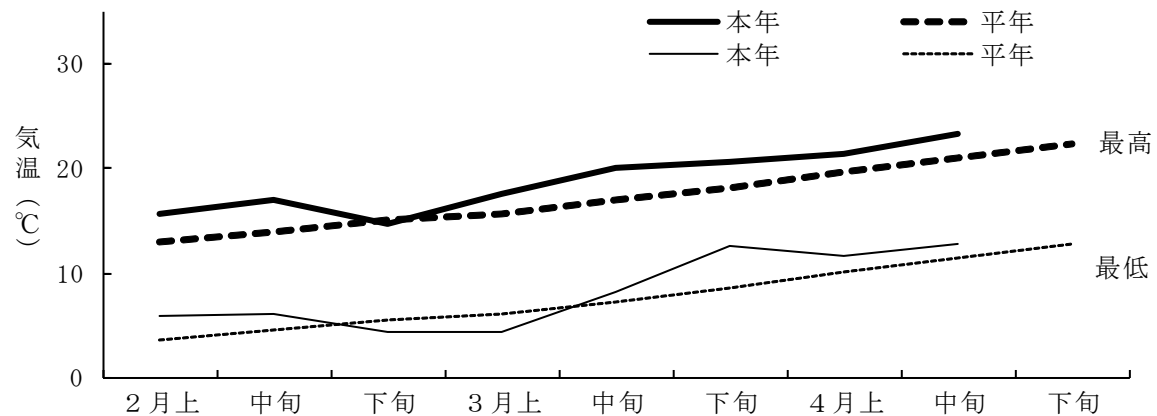
令和5年4月27日
鹿児島県病害虫防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（4月22日から5月21日） 令和5年4月20日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	40	30	30	九州南部では、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。奄美地方では、気温は平年並か高いでしょう。
	奄美地方	20	40	40	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	20	40	40	
日照時間	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	40	30	30	

II. 1～4月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通 作物	早期水稲	葉いもち	並	並
野 菜	トマト	灰色かび病	やや少	並
		うどんこ病	多	多
	ピーマン	斑点病	多	多
		うどんこ病	並	並
		アザミウマ類	多	多
	バレイショ	疫病	並	並
花 き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	多	多
		アザミウマ類（県本土）	やや多	やや多
果 樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
茶 樹	チャ	チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少
		チャハマキ	並	並
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ	並	並
		カンザワハダニ	並	並
		クワシロカイガラムシ	並	並

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

1. 早期水稻

(1) 葉いもち

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

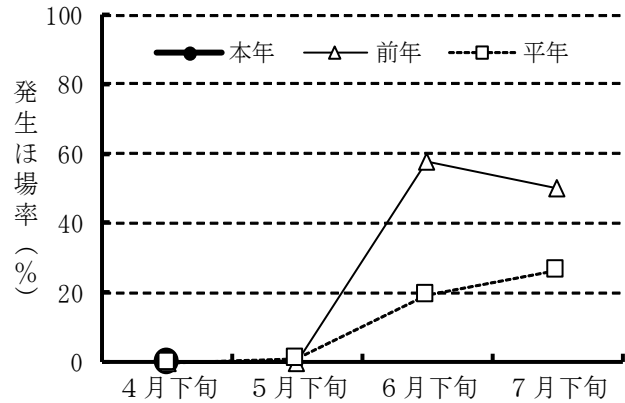
発生ほ場率0%（平年0%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の常発地や前年の多発ほ場では発生に注意し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(イ) 置き苗は発生源となることが多いので、補植後、速やかに処分する。

(ウ) 窒素肥料の多施用は発生を助長するので、避ける。



防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ基腐病

<採苗>

(1) 採苗時に用いるハサミは、こまめに消毒（火炎滅菌または丁寧な水洗と拭き取り）する。

(2) 採苗は、株の地際から5cm以上切り上げて行う。

(3) 苗消毒は、必ず採苗当日に行う。なお、消毒液は必ず使用する当日に調整したものを用いる。

<本ぼ>

(4) 排水が不良なほ場では、植付前に耕盤破碎（地下排水の促進）や明渠の施工（表面排水の促進）などの対策を行う。定植前にはほ場の排水機能（明渠等）とほ場に隣接する排水路の点検を必ず実施し、ほ場からの排水口は排水路に確実に接続する。

(5) 発病株は見つけ次第除去して、その周辺株には銅剤を散布する。苗消毒による感染防止効果が低下する定植5週目頃に、予防・殺菌効果のある剤を散布する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221018104909-1.pdf), 農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator03.pdf) をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第3版)
令和4年10月改訂



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和3年度版)

Ⅱ. 野 菜

1. トマト

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率38% (平年57%)
：低い (-)

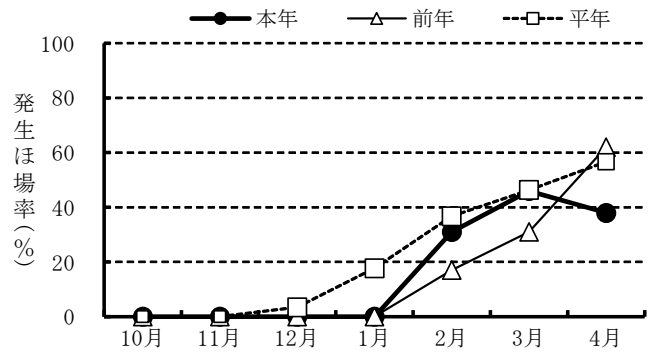
発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行い、過湿にならないよう努める。
- (イ) 果実部やへたの付近に付着する花弁は本病の発生源となるので、こまめに除去する。
- (ウ) 発病葉や発病果実はビニール袋等に入れてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



灰色かび病の発生ほ場率 (トマト)

(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

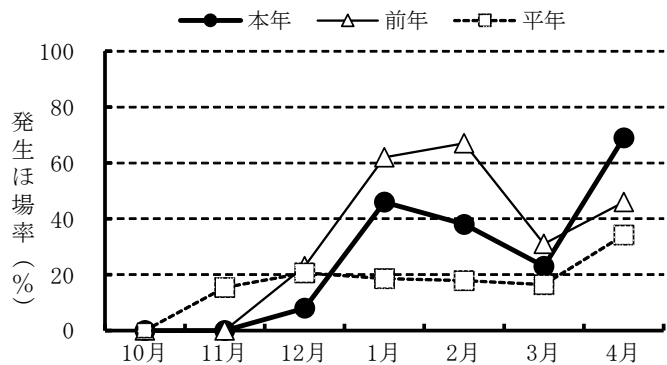
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率69% (平年34%)
：高い (+)

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 通風採光をよくし、老化葉は努めて除去する。
- (イ) 薬剤は葉裏に十分かかるよう散布する。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率 (トマト)

2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

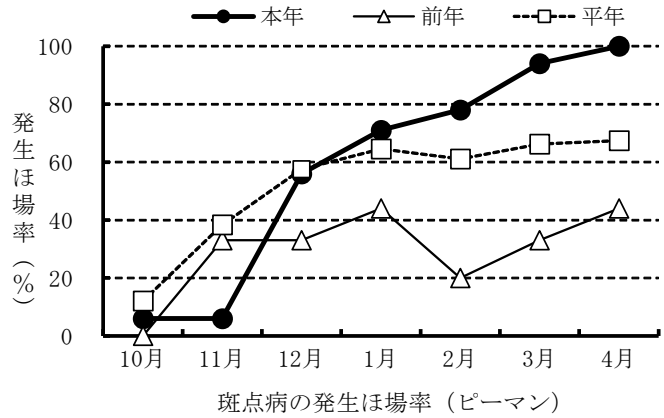
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率100%（平年67%）
：高い（+）

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

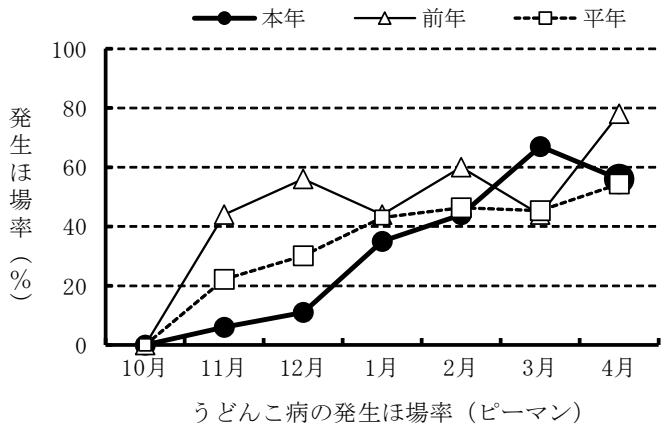
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率56%（平年54%）：並

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (イ) 草勢低下は発生を助長するので適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 薬剤は下位葉や葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

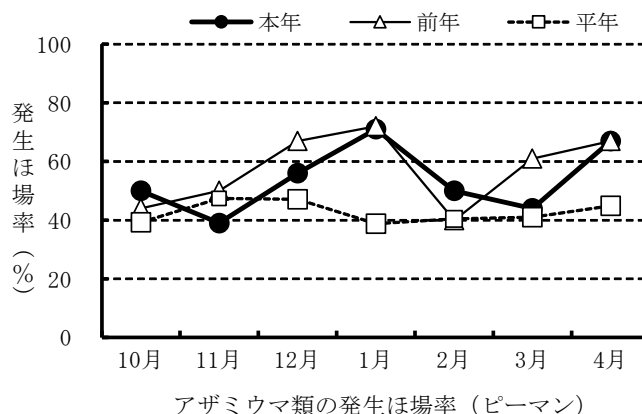
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率67%（平年45%）
：やや高い（+）
発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 巡回調査の結果、主な発生種はヒラズハナアザミウマであった。
- (イ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。
- (ウ) カブリダニ類等の天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (エ) 被害果が確認されるようになったほ場では直ちに防除を行う。
- (オ) 花や新芽の中など、薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。



3. バレイシヨ

(1) 疫病（令和4年度技術情報第14号:令和5年3月6日付け参照）

ア 予報内容

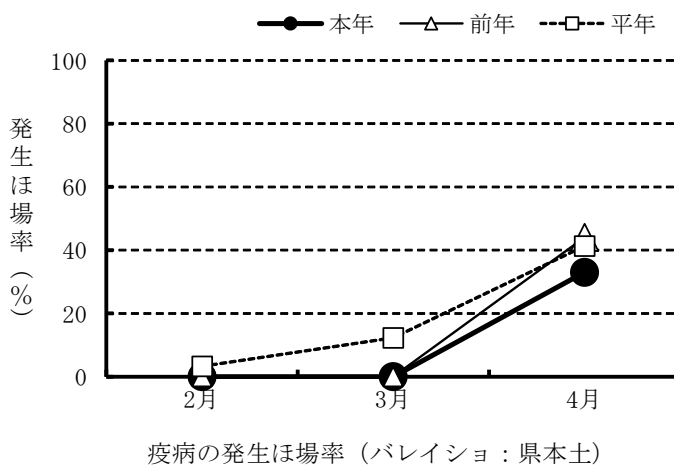
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 対象作型 春作(加工原料用)
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率33%（平年44%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病害は雨が数日続いた場合に発生しやすく、発病後急速に病勢が進展する。
- (イ) すでに発生しているほ場では、直ちに治療的効果の高い薬剤を散布する。その後は、進展状況に応じて5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。
- (ウ) 未発生ほ場では、発生前に予防効果の高い薬剤を散布するよう努める。
- (エ) 薬剤の選定にあたっては、ラベルをよく読み、収穫前日数等の使用基準を遵守する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (カ) 多発ほ場では収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。
- (キ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。ほ場外へ残渣の持ち出しが困難なほ場では、天地返しにより残渣を土中深く埋没させ、次作にイネ科牧草等の輪作を行う。
- (ク) 薬剤防除にあたっては令和4年度技術情報第14号(令和5年3月6日付け；ホームページ掲載)を参照。



.....
防除に関する今月の留意事項

1. トマト黄化葉巻病 (TYLCV), キュウリ/メロン退緑黄化病 (CCYV),
キュウリ/メロン黄化えそ病 (MYSV)

本年3月の調査において、キュウリ退緑黄化病(発生ほ場率75%, 平年32%)とキュウリ黄化えそ病(発生ほ場率8%, 平年7%)の発生が確認され、キュウリ退緑黄化病は平年より多かった。これらの病原ウイルスはタバココナジラミやミナミキイロアザミウマにより媒介される。今後これら媒介虫の活動が活発となり、ウイルスを保毒した成虫がハウスの外に飛び出すので、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 媒介虫がハウス外へ飛び出すのを防ぐため、栽培終了まで防除を徹底するとともに、防虫ネットは継続して設置しておく。
- (2) 栽培終了後は抜根し、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

2. イチゴのハダニ類

<本ぼ>

栽培終了後の本ぼから苗床への侵入を防ぐために、以下の防除対策を徹底する。

- (1) ハウス外への拡散を防ぐため、栽培終了まで防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (3) 栽培終了後は抜根し、ハウスを確実に密閉して、植物が十分枯死するまで、必ず蒸し込む。

<苗床>

本ぼでの発生は苗からの持ち込みによることが多いので、苗床で以下の防除対策を徹底する。

- (1) 気温の上昇とともに急激に増殖するので、管理作業時に注意深く観察し、初期防除に努める。
- (2) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、葉裏にもかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

3. イチゴ炭疽病<苗床>

イチゴ炭疽病は風雨や灌水のはね上がりにより感染が広がる。また、気温の上昇に伴い発生が多くなり5月上旬から感染好適期となる。健全な苗を確保するためにも、以下の防除対策を徹底する。

- (1) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。
- (2) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。
- (3) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。
- (4) 薬剤による予防散布は10~14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (5) 地床育苗では、ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。
- (6) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

4. アブラナ科野菜収穫後の耕種的病害対策（アブラナ科野菜根こぶ病）

次作での発生を抑えるため、以下の総合的な防除対策に努める。

- (1) 本病はトラクター等の作業機がほ場に入出入りする出入口付近で多く見られるので、出入口付近の株を引き抜き、こぶ状のものがいないかを目視で確認する（図1, 2）。
- (2) 発生ほ場ではブロッコリーの作付は行わず、キャベツやハクサイ等は抵抗性品種を利用する。
- (3) 発生ほ場では作業機械等による汚染土壌の持ち出しを防ぐため、作業機械に付着した土を丁寧に洗浄する。また、発生ほ場の管理を最後にするなど、被害を拡散させないように注意する。
- (4) 生育が著しく劣ったほ場等で、根にこぶ状のものが付着してしている場合は、本病の発生が考えられるので、最寄りの地域振興局・各支庁の農政普及課もしくは病害虫防除所に連絡する。



図1 生育初期～中期ブロッコリーにおける発病株 図2 生育初期～中期キャベツにおける発病株
(北薩地域振興局農政普及課出水市駐在提供) (出典:キャベツ根こぶ病の土壌管理による発生抑止と総合防除対策)

5. バレイシヨの収穫後の耕種的病害対策（令和4年度技術情報第13号（1月27日付け）、第14号（3月6日付け）参照）

収穫残さが次作での疫病、菌核病、軟腐病及びそうか病等の一次伝染源になるので、収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

- (1) 収穫後の発病茎葉やいも、くずいも等は、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) 疫病、菌核病の発生が多く、残さの持ち出しが困難なほ場では、天地返しにより残さを土中深く埋没する。
- (3) イネ科牧草等の作付けによる輪作に努める。

6. その他野菜等の残さ処理について

露地野菜等の残さは、次作に対して様々な病害虫の伝染源（発生源）になる。多くの作物に感染する菌核病や軟腐病等には、特に注意が必要である。長期間放置してほ場の病原菌密度や虫数を増加させないように、収穫終了後はできるだけ速やかに残さ処理を行う。

- (1) 発病茎葉・根・果実を含め、収穫後の残さは、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) ほ場外へ残さの持ち出しが困難なほ場では、複数回の耕耘により残さを早めにすき込み分解を促す。

Ⅲ. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率50%（平年24%）
：高い（+）

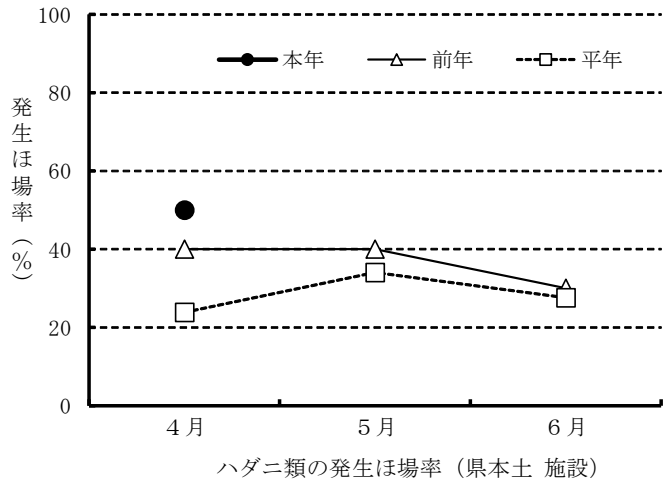
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように十分量を散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率40%（平年25%）
：高い（+）

発生程度は低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病（TSWV）、キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および早期防除に努める。

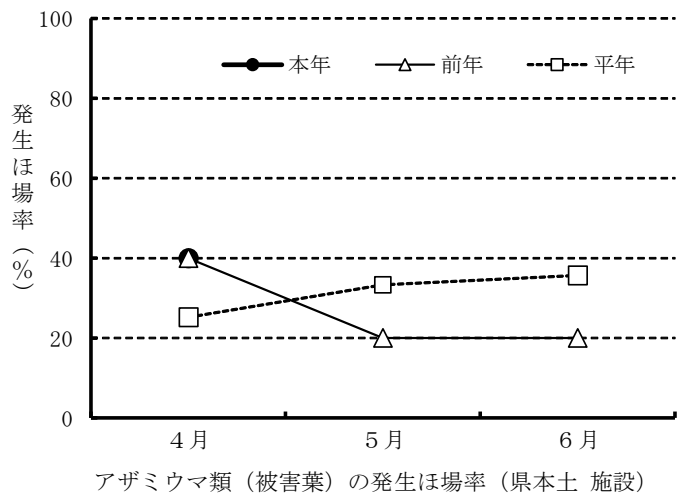
(イ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(ウ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(オ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(カ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生に注意する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病 (令和4年度技術情報第15号 (3月13日付け参照))

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発 生 量

県本土・熊毛地域 やや少

奄 美 地 域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量: やや少 (-)

発生ほ場率 0% (平年3%): やや低い (-)

(イ) 気象予報

降水量: 平年並みか多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量: やや少 (-)

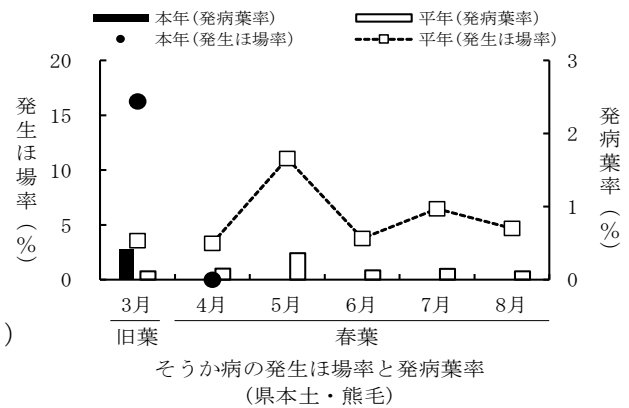
発生ほ場率 0% (平年6%): やや低い (-)

発病葉率 0% (平年0.2%): 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発芽直後や落花期の防除適期を逸さないように努める。

(イ) 開花期以降のデランフロアブルとマシン油乳剤の近接散布は葉害を生じる恐れがあるので、
間隔は30日以上あける。



(2) かいよう病 (令和4年度技術情報第15号 (3月13日付け参照))

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発 生 量

県本土・熊毛地域 やや少

奄 美 地 域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量: やや少 (-)

発生ほ場率 0% (平年8%): やや低い (-)

旧葉 (3月) 発生ほ場率27% (平年27%): 並

(イ) 気象予報

降水量: 平年並みか多い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量: 並

発生ほ場率 0% (平年4%): 並

発病葉率 0% (平年0.04%): 並

(イ) 気象予報

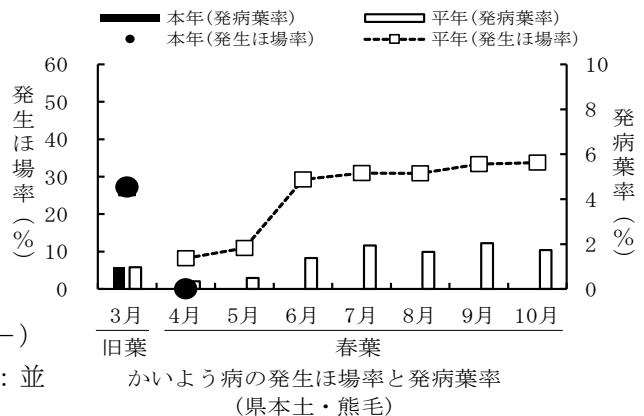
気温: 平年並みか高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 強風雨等による葉や果実への傷口発生を防ぐため、防風林、防風樹の管理に努める。

(イ) 春葉が硬化する前までに予防散布に努める。

(ウ) 銅水和剤の使用にあたっては、葉害を軽減するために炭酸カルシウム剤を必ず加用する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並

発生ほ場率8% (平年9%)：並

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか多い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少 (-)

発生ほ場率0% (平年13%)：やや少 (-)

寄生葉率0% (平年0.2%)：並

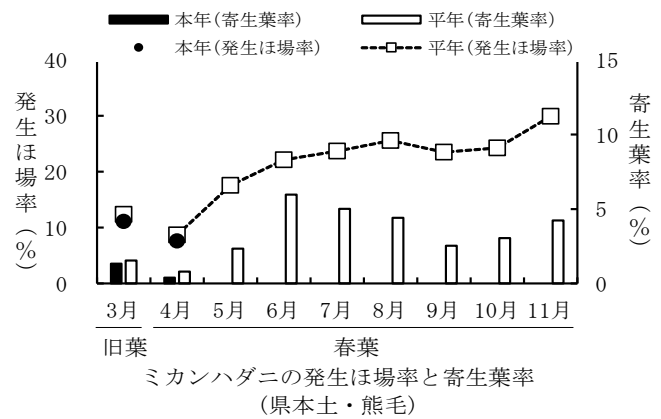
(イ) 気象予報

気温：平年並みか高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤(97%)を主体とした防除を行う。



V. 茶 樹

(1) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県内全域	
(イ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ	やや早い
	チャハマキ	やや早い
(ウ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	やや少
	チャハマキ	並

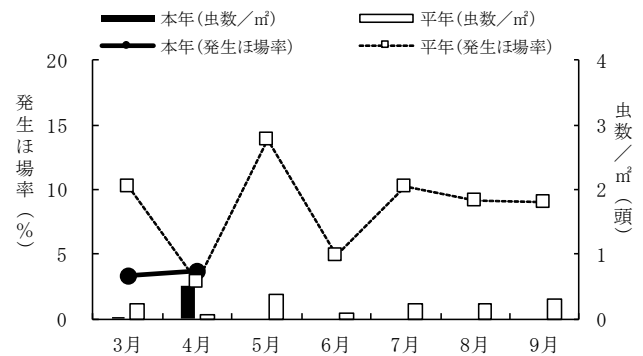
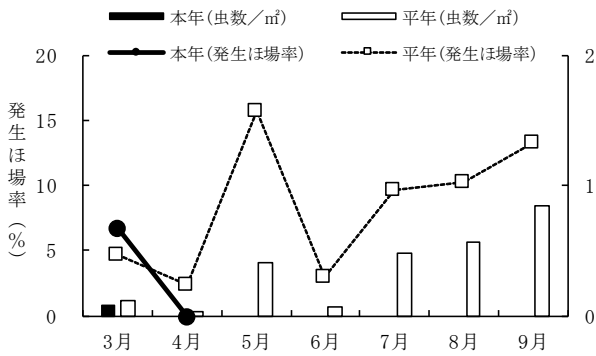
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 2%) : やや低い	4% (平年 3%) : 並
【知覧町フェロモントラップ】		
誘殺数 (3月1半旬~4月4半旬)	217頭 (平年202頭) : 並	203頭 (平年397頭) : 少ない (-)
越冬世代の発蛾ピーク	やや早い	やや早い

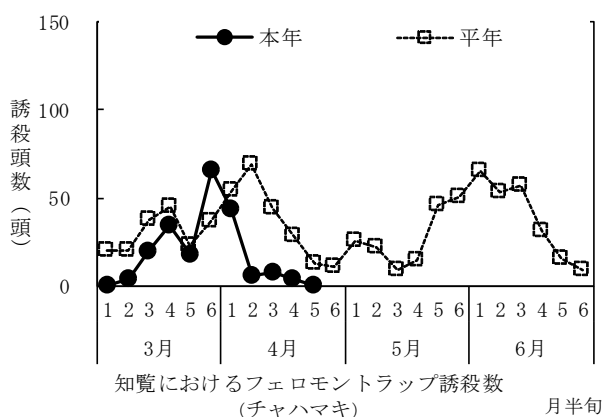
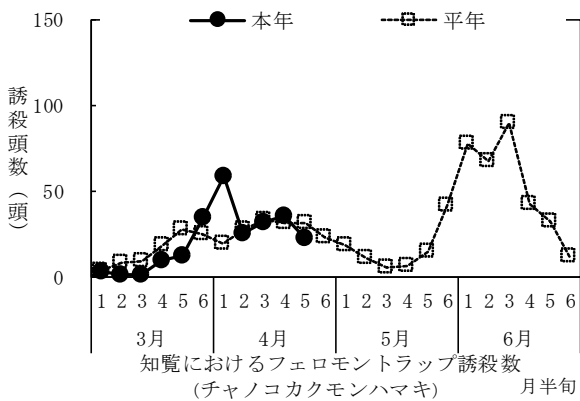
ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は、発蛾最盛日をフェロモントラップ等で調査し、若齢幼虫期に行う。
- (イ) 薬剤又はハマキ天敵を散布する場合は、発蛾最盛日から16~22日後に実施する。また、薬剤とハマキ天敵との混用や近接散布を行う場合は薬剤選定に注意する。
- (ウ) 南薩地域の一部でジアミド系薬剤に対する感受性が低下しているので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



チャノコカクモンハマキの発生ほ場率とm²当たり虫数

チャハマキの発生ほ場率とm²当たり虫数



(2) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生時期 並
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

【巡回調査】

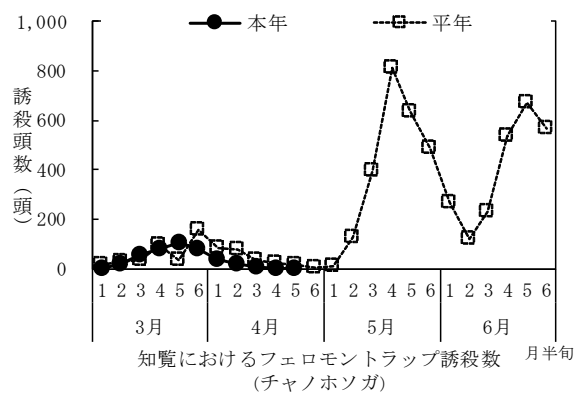
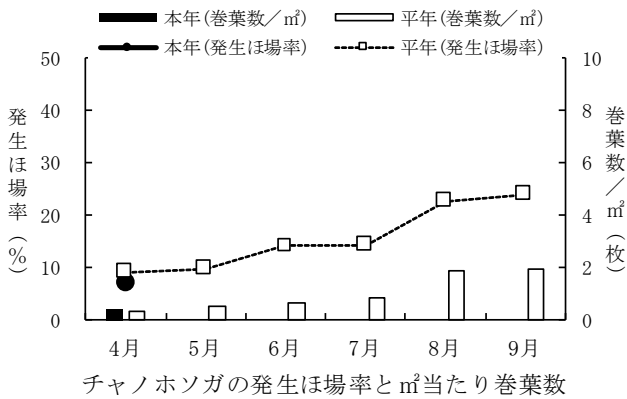
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 7% (平年 9%)：並
㎡当たり巻葉数 0.1枚 (平年0.3枚)：並

【知覧町フェロモントラップ】

- 誘殺数 (3月1半旬~4月4半旬) 399頭 (平年570頭)：並
- 越冬世代の発蛾ピーク： 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤による防除は二番茶に実施する。
- (イ) 第一世代成虫の発生時期は5月上~中旬と予想されるので、この時期に二番茶の新芽生育期が重なる園や品種では、特に被害の発生に注意する。
- (ウ) 萌芽~1葉期頃に葉裏への産卵や幼虫の潜葉を確認してから散布すると効果的である。
- (エ) 二・三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期(摘採前日数)に注意する。
- (オ) IGR剤及びビジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(3) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
チャノキイロアザミウマ 並

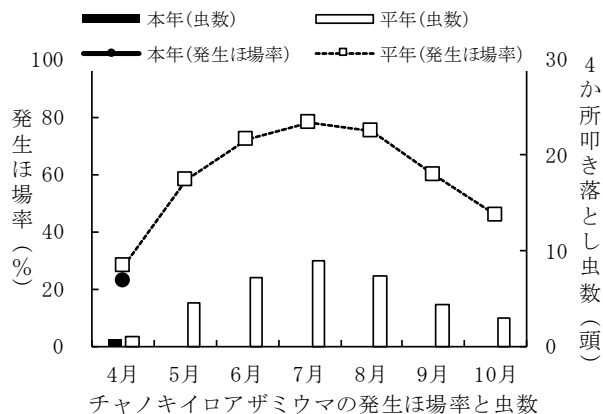
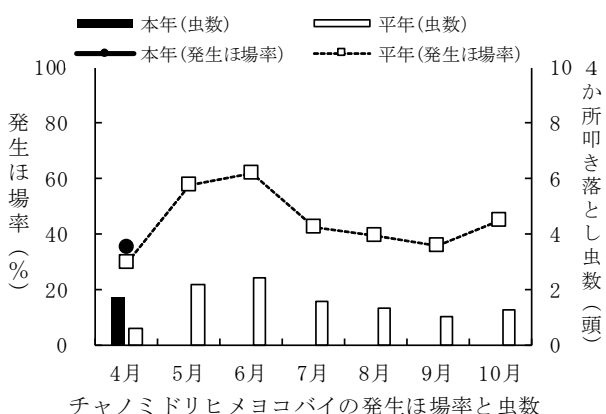
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果(4月中旬)

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや多	並
発生ほ場率	35%(平年 30%)：並	23%(平年 28%)：並
虫数(4か所たたき落とし)	1.7頭(平年0.6頭)：多い(+)	0.8頭(平年1.0頭)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は二番茶及び三番茶の萌芽～1葉期に実施する。



(4) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

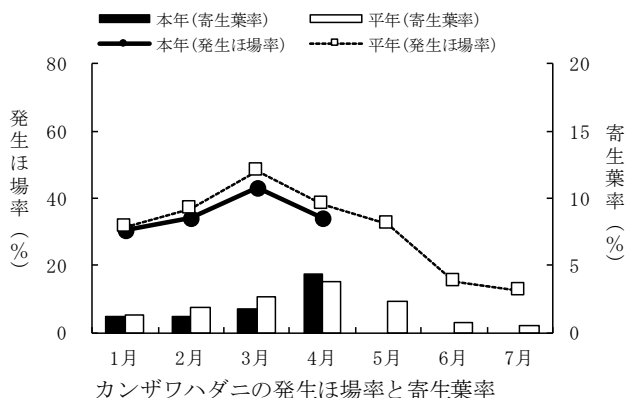
(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 34% (平年38%)：並
寄生葉率 4.3% (平年3.8%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生の多いほ場では、一番茶の刈番茶摘採後に防除する。



(5) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生時期 早い

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 (令和4年10月)：並
発生ほ場率 38% (平年49%)：並
寄生株率 18.8% (平年20.8%)：並

(イ) 有効積算温度による防除適期(第一世代ふ化最盛期)予測

地点	ふ化最盛期		
	本年	前年	平年
枕崎	4月17日	4月28日	4月27日
加世田	4月22日	4月30日	4月30日
さつま柏原	5月8日	5月15日	5月11日
溝辺	5月11日	5月13日	5月17日
鹿屋	4月26日	5月5日	5月5日
志布志	4月28日	5月5日	5月6日

注1) 本年の予測には各地のアメダス観測地点における日平均気温を用い(4月25日まで)、4月26日以降は平年値を用いた。

2) 有効積算温度は、発育零点10.5℃、1月1日を起算日として積算した。

3) 現地ほ場の気温は、アメダス観測地点より低い場合があり、上記の予測日より数日遅れる可能性があるため注意する。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ふ化最盛日は地域によって差があるので、ふ化状況を調査し、ふ化最盛日を把握する。

(イ) 薬剤は、ふ化最盛日から5日以内に枝や幹に十分かかるように散布する。

.....

防除に関する今月の留意事項

1 炭疽病

炭疽病は前年秋季の発生が多かったため、「やぶきた」など、本病に弱い品種を中心に発生状況に十分注意して防除対策に務める。

(1) 前年秋期(10月)の巡回調査では、発病率は6.1%(平年10.6%)とやや低かったものの、発生ほ場率は71%(平年53%)と高く、一番茶への伝染源となる罹病葉が認められた地点数が多かった。

(2) 「やぶきた」等の本病に弱い品種は特に注意する。

(3) 二・三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期(摘採前日数)に十分に注意する。

(4) 多発状態の続く茶園では、整枝・剪枝(深刈り等)により伝染源を除去する

表 令和4年10月の炭疽病の発生ほ場率及び発病葉数

	R 4	平年	平年比 (%)
発生ほ場率 (%)	71%	53%	134
発病葉数 (枚/m ²)	6.1%	10.6%	58

2 チャトゲコナジラミ

県内全域で発生がみられ、多発ほ場も確認されている。多発するとほ場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

(1) 薬剤防除には効果の高いアブロードエースフロアブルを使用し、若齢幼虫期に散布する。

(2) 第一世代のクワシロカイガラムシふ化最盛期とチャトゲコナジラミの若齢幼虫期はおおむね同時期であるので、同時防除を行う。

(3) 一番茶摘採後に防除できない場合は、秋整枝後の11月上旬～中旬(第4世代の若齢幼虫期)に防除を行う。

(4) 幼虫は葉の裏のみに寄生し、裾部と葉層下部に寄生が集中することから、防除の際は葉裏にかかるように10a当たり400ℓの散布量で丁寧に薬剤散布を行う。また、裾刈りはチャトゲコナジラミの除去効果と葉裏への薬剤付着性が高まり効果的である。

(5) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。また、茶株の更新を行うと本虫の密度低減が図られる。

3 農薬の使用について

農薬の使用にあたっては、収穫前日数を守り、収穫前の隣接茶園へのドリフトがないように十分注意する。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。